

わたくしの

シルクロード ①



横張和子

(一) パルミユラ

一九七四年の二月のおわり、わたくしはパリからベイルートを  
経て、シリアのダマスクスに着きました。その国立博物館に漢代  
の絹織物が保管されていて、わたくしはその閲覧を願ひ出ていた  
からです。西宮の関西学院大学の小玉新次郎教授のお口ききで、  
博物館から出来るだけの便宜を提供しようというお返事をいただ  
いたので。そこで出発という時になって、近東の雲行きがあや  
しくなり、戦火が飛び散って、渡航し得る状態でなくなっていま  
いました。しかし十月ごろになって戦況は沈静し、どうやら動け  
そうな様子になったので、とも角パリに飛びました。そこでシリ  
ア大使館をたずね、入国の可否を問いますと、何事もなかったか  
のようにビザの手続の方法を教えてくださいました。ベイルート経由  
ならば、レバノンとシリアの国境でとれということです。その時  
ですが、あちらのいう国境 *frontière* (フロンチエール) という  
のがとっさに理解できないで、もう一度説明してもらいました。  
日本に住んでいて、陸続きの国境の概念がまるでなかったもので  
すから。パリ発ベイルート行きの飛行機はローマを経て四時間ほ  
どの旅ですが乗客の中で黄色の肌をしたアジア人はわたくし一人

で、他はヨーロッパ人、アラブ人そしてアフリカの人たちでありました。だれも身体が大きくて、それでも小柄なわたくしはつぶされそうで、余り気持のよいものではありませんでした。

そのうち、中でも巨漢の二人の男が大声で言い争いをはじめました。黒人とアラブ人で、どちらも自国の言葉でやりあっているらしく、まわりはくすくす笑っていますが、原因はといえば、前の席の黒人のシートの傾け方が後のアラブ人に気に入らないということらしいのです。無理もないことで、やがて黒人に二人分の席を提供するから席を替えてほしいというスチュアデスの申し出でおさまりました。

ペイルトに着いたのはもはや夜で、ここで日本の製薬会社のエージェントで働くアルメニア出身の青年が出迎えてくれました。かれの車で宿に着くまでの道は坂道が多く、しかも道幅は狭く、曲りくねっていて、車はいく箇所も角を曲り、やがてネオンサインの点滅するにぎやかな繁華街に入りました。その感じは熱海の温泉町の印象にひどく似ていました。ここには日本企業が進出していて、日本人も多いところですが、シリア入国をいそいでいたのですから、翌日は博物館を見学しただけで、午後になって、車でレバノンとシリアの国境間に連なる山々を越えて、ダマスクスに行くことになりました。前夜出迎えてくれたDさ

んも行ってくれることになり運転手も含めて三人の小旅行となりました。このあたりはフランスの影響が濃厚で道路の標示も標式もフランス式がそのまま使われていますし、道の途中にはほんとは美しい優雅なたたずまいにも出会うのですが、すぐそばに黄色の土砂が掘り返しのままあつたりして、つまり洗練と泥臭さが同居していて、ちぐはぐとも、また妙な調和ともなつて、いかにも近東らしい風景をみせています。処々にパレスティナ難民のキャンプがかたまりのようにしてあり、七年ほど前にも目撃したのと少しも変わっていませんでした。

ペイルトの市街をぬけて丘陵地帯をのぼり、その最も高い所にレバノンの国旗や貨幣の図柄にもなっているレバノン杉の大木があります。ここからは地中海が見渡せます。地中海の色といえど紺碧のそれと聞いていますのに、冬季のせいにかくすんだ色でべつに変哲もない海の眺めです。しかしその昔、フェニキア商人が船を駆って活躍し、古代史を華やかに彩ったことに想いをはせますとやはり感慨は迫ってきます。それから再び道を東にとりますと、こんどはレバノンとアンチレバノンの二つの山脈の山越えの道になります。山は樹が少く、荒れた山肌をさらしていますが、処々に雪渓があり、白雪が残っていました。この年はヨーロッパもそうであったようですが、暖冬異変ともいふべきで、毎日が小

春日和の暖い日が続いており、雪原はきつい日射の太陽にきらめいていました。静寂な眺めですが、この南方の高原一帯がアラブとイスラエルの勢力の対峙するところで、そのせいか不気味な緊迫感もありました。

ベイルートを出て三時間ほどしてシリアの首都、そして世界最古の都といわれるダマスクスに着いたのは夕暮れも近いころでした。白茶けた泥の景色が続いていましたのに、市街地に入る道筋になるとポブラ並木が続ぎ、それには淡い緑の葉がでて、そのあしもとは小さな流れがあり、雪解けの澄んだ水があふれるようにして流れていました。ダマスクスは二月だということにもう春満開でありました。しかしいったん町中へ入りますと、至るところ非常時下の態勢で、町並みにも戦争の重荷がずっしりとのしかかっているようでした。ダマスクスも二度目の訪問で、前に投宿したホテルは満室で断られ、やってはきたものの今晩泊る宿がないということは急にわたくしを不安にしました。親切なDさんと運転手はそれでも下町の方にあるホテルを見つけて来てくれました。食堂はないということです。Dさんは町のいわば大衆食堂に連れていき、夜の食事はここですること、などと細々したことにも助言をしてくれたりしまして、そして羊の脂を砂糖で固めた甘いお菓子を大量に買い込んですっかり夜のとぼりのおりた真暗な

道をベイルートに向けて帰ってしまいました。一人きりになりました。宿はと言えば、外国人が泊る宿というよりはこの国の人々が使う宿屋の如きで、投宿の人々はいずれも民族服で、それは重々しくもあり、圧迫感ともなりました。しかし安宿ではないらしく、部室の敷物、戸棚、椅子、テーブルなどは古いものでも中々の上物で、戦争というきつい負担がなければ、これらの道具も生き生きした精彩あるものになるのでしょうけれど、電燈の灯は余りに暗く、すべてが沈鬱な雰囲気でした。そこに入ってきたのが、四十歳ぐらいのひげをたくわえたむっつりした大男で、これが部室のボーイであつたものですから、もはや居心地は恐怖に近いものとなりました。さびしいところに追い打ちがかかるように、その夜は雨。春先のものすごい雷鳴が轟きわたり、雨は沛然と降りしぶきました。

さて翌朝のことです。外の異様なまでの騒ぎに目をさましました。何ごとかと外をみますと、宿の前の広場はカーキ色の軍服を着た兵隊でうずまり、大型のトラックに積み込まれ、次々と出発していくのです。あの緊迫の高原に警備と示威のために出動していくのだそうで、これは毎日行われると聞かされました。鏡の中でわたくしの顔は目が血走ってきました。朝食もとらず、タクシーで在シリア日本大使館に駆け込みました。先に手紙を出して

おいたので、夏目さんという書記官の方がすぐに会って下さいましたし、また替えの宿も原地の女性秘書を通してリザーブもしてくれました。ホテルは三日ほど待ってほしいということだったので、再び騒音の宿にもどり、その翌日の朝になって、はじめて、

「朝ごはんをどうぞ。」と言いました。間もなくして例の偉丈夫が直径一米にも及ぶかと思われるような大皿を捧げるようにもってきて来ました。彫刻のある銀色のお盆の上にはなんとまあ沢山の小さなお皿が並んでいたことでしょう。パン、フライドエッグ、チーズ、アンズジャム、オリーブの実、そのほかはじめてみる野菜や果物などです。それに優雅な銀色のポットにお茶が入っています。久しぶりの朝ごはんでようやく人心地がつかえました。そしてこの宿の人の無愛相にかくされた心尽しが分って、宿替えを決めてしまったことを後悔しました。

しかし数日後、この町で一番大きなホテルに引越しました。前の宿からいくらでもない道のりでしたので、車つきのスツーカーを道の上に転がしながら引張っていきましました。すると一人のいがぐり頭の男の子がかけ寄ってきて代って引張ってくれたのです。わたくしはかれが少しばかりの小遣銭がほしくてしてくれたものと思っただけですから、いくらかの小銭を渡しました。彼はそれを抵抗なしに受けとり、姿を消しました。間もなくです。わ

たくしが買ひ物のためホテルの外に出た時、待ちうけていたかのように、わたくしに近づいて来て、そして落花生の豆の袋を差し出しました。ちょうどあの小銭に同じ値のほどのものでした。身なりもさほどよくないし、外国に出れば、何度も子どもたちのおねだりに出会っていましたが、それと同じ考えでしたことでしたが、かれの好意がものほし気なものでなかったことを知って、かれにすまない気持をもったことでした。その後もダマス滞在中、よくかれとは屋台でジュースを飲みました。写真もとりましたけれど、今ごろどうしてますでしょう。それに親切であったベイルートの二人についても、あれから続いた戦禍に安否が気遣われています。

前書が長くなりましたけれど、わたくしはシルクロードもまたその終着駅の方に降り立ったのです。

さてパルミユラですが、椰子の町という名のこの町は、今は貧寒な辺境の町ですが、紀元一世紀から三世紀にかけて、東のパルティア勢力と西のローマ勢力との間にあって、その緩衝地帯をなす、かつメソポタミアから地中海側にぬける東西の大交通路の路上にあって、通商の中継基地となり、東西の物品に関税をかけた、莫大な利益を得ていた古代に典型的な隊商都市でありました。ローマ皇帝も親ローマとして帰順さすために、しばしばこ

を訪問し、記念に神殿や円形劇場などを建設しましたが、ゼノビア女王の時、ローマからの独立を画して出兵し、結局はローマの反撃を受けて、紀元二七三年、市は炎上し、壊滅に至り、そのまま砂漠中に没して去ってしまったのです。そして一九三〇年代になって、フランスとシリアの考古学者の協同作業で発掘とその修復の事業がはじめられ、今日にも続けられています。

布の資料が発掘されたのは遺跡の西側にある通称「墓場の谷」と呼ばれる所に立っている塔のような墓からでありました。それはバルミユラ独特の建築で、大きな方形の切石を積み上げて塔とし、中を数階に分けて、これらは梯子でつながれています。各階は真中に通路があつて、その両側に何段か重ねて奥行の深い龕が掘りぬかれ、そこに死者の遺骸をおさめ、その口には死者の肖像をあらわす高浮雕を彫りつけた石板を立ててふさぎます。一つの塔はバルミユラの商人の廟で、先祖及び同族が葬られたもののよう、バルミユラ商人の富裕な暮しがうかがわれます。遺骸は布に包まれていました。遺体を直接包んでいたものは亜麻布でありました。ごく少数例ながら木綿の布もあったことは注目されることでした。亜麻布や綿布は没薬という香気の強い物質が塗り込まれていて、それで骸を幾重にもぐるぐる巻きしたので、年月を経るにしたがつて布は骸を中にしてカプセルのようになっていまし

た。この亜麻布のカプセルの上に裝飾の目的で毛織物と絹織物が巻かれていたのです。どれも千何百年の長い年月を経ってきたものですから、保存の完好な形はのぞむべくもないことですが、採集された夥しい数の断片類は学術的に極めて貴重な新発見であったのです。

シルクロードは中国の絹がローマに運ばれた道に名づけられています。東西の古文獻にみえている中国絹の西漸もそれを立証するような考古学的な資料は、西域においては、つまり中国の勢力が直接及んだ国々においては見つかっていましたが、純粹な商業行為として中国から西方ローマに運ばれた絹の物的な証拠は、バルミユラの発掘が行われた一九三〇年代以前にはなかったのです。ですから中国の絹、中でも模様を織り込んだ錦や綾などは果して、ローマに運ばれたのであろうかと疑問視する学者も少なくなかったのです。バルミユラの墓から絹織物が出土したという報告はきつと大きな反響を呼んだことでしょう。事実、バルミユラから出土した絹布をめぐり、それが中国産か否かの断定の論議は学者の間で白熱化したようであります。わたくしもまたそれを確かめに、遙々日本からやって来たのです。

バルミユラ出土の布は現在ダマスクス博物館に展示され、それ以外のものはグレコ・ロマン室の室長管理の下に段ボールの箱に

入って、金庫の中に納められています。閲覧の許可は館長から出され、わたくしはグレコ・ロマン室長の部室の一部に机をあてがわれ、その場所でのみ見る事が許されました。驚いたことに、わたくしが見ている間、詰襟服つめえりを着た謹厳な面持ちの初老の男の人が肩を張り、両手を膝において座っているのです。つまりその人はわたくしの見張番であったのです。わたくしは厚紙の上に糸で軽くとしつけられたままの學術標本を何の遮蔽物もなく、直接に至近距離でみる事が許されたわけですが、それによりいささかの損傷もなしとは言えませんし、事実動かしますと、はらはらと微細な繊維が崩れて行くのを認めたのですから。ですから緊張のしっ放しで、時おり窓から外に目をやりますと、春の陽光がいっぱいに満ちて、みどりの芽を吹き出した庭の草がとても新鮮でした。

パルミユラの布は大別しますと、亜麻（綿）布、毛織物、絹織物に分類できます。ヘレニスティックな世界でもあったパルミユラの亜麻布はギリシャの貫頭衣の流れを汲み、やがて中世のキリスト教の世界での衣服の原型となります。毛織物は内陸部では冬は非常に寒く、それゆえ多用されたと考えられます。どちらも西方の地域では古い歴史をもつものであったことは文献にもみえています。中国側では毛織物は西方からの輸入品であったことも

それに述べられています。亜麻布と毛織物はパルミユラ資料からみて、いかにも西方的な特性をもつものと思います。ところで絹織物ですが、パルミユラの絹がすべて中国産としてしまうには問題で、西の国で発見されたばかりにそれは一層複雑なものとなっています。わたくしはパルミユラの絹の性格をはっきりさせないことには、唐代の織物、ひいてはわが国の上代裂について言及できないと思っています。パルミユラ資料で得たことの一つは織物の最も基本的な技法である平織と綾織の問題です。平織は経糸と緯糸を一对一に浮沈させ、綾織はその交錯を規則的にずらし布面に斜文を作ります。どちらも今日の織物では日常적입니다。けれど古代中国の絹織物の場合に綾織の概念を安易に導入することは後の問題を分りにくいものになっていると思うのです。この辺のことはもう少し説明しなければなりません。それは次回にさせていただきます。

（古代染織史研究家）

